

暮らしを変えるバナナ

バランゴンバナナ・リニューアル計画



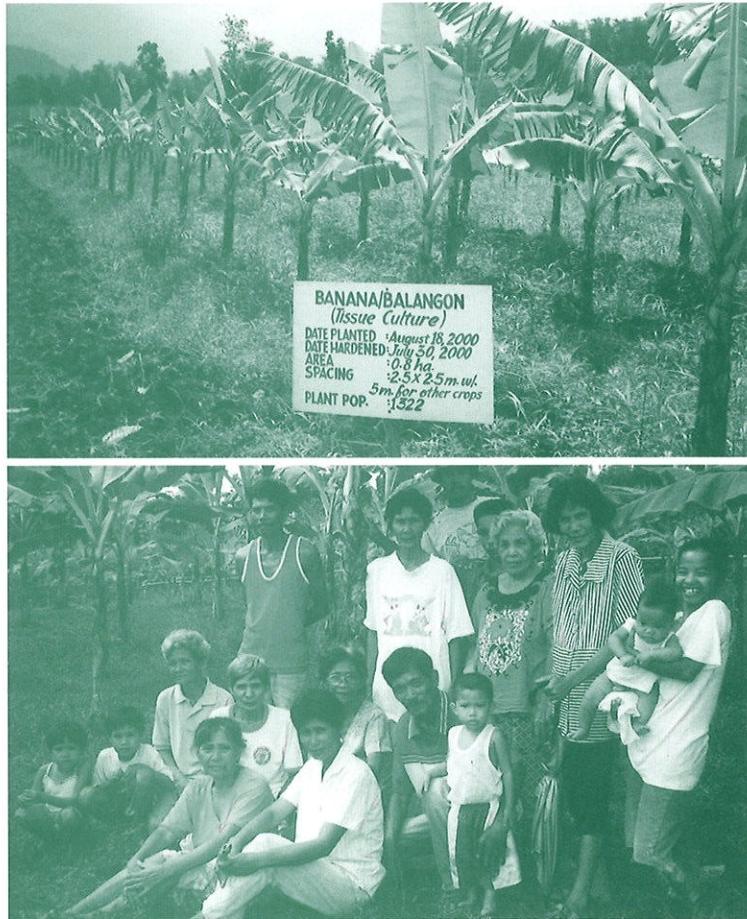
★ バランゴン・バナナは、安全でおいしいバナナとして、10年以上日本のみなさまに愛されてきました。無農薬栽培で味がいいことに加え、フィリピンのネグロス島の人々の自立への支援も盛り込んだ、他に類を見ないバナナがバランゴンです。

★ このバナナを、もっとたくさんの方に食べていただきために、品質のよいおいしい果実を安定した価格で、1年を通してお届けするため、産地を広げたり、栽培技術を改善したりする「バランゴン・リニューアル計画」が進められています。

★ 同時に「バランゴン・リニューアル計画」を基盤とした「地域総合計画」のプロジェクトをおこなっています。

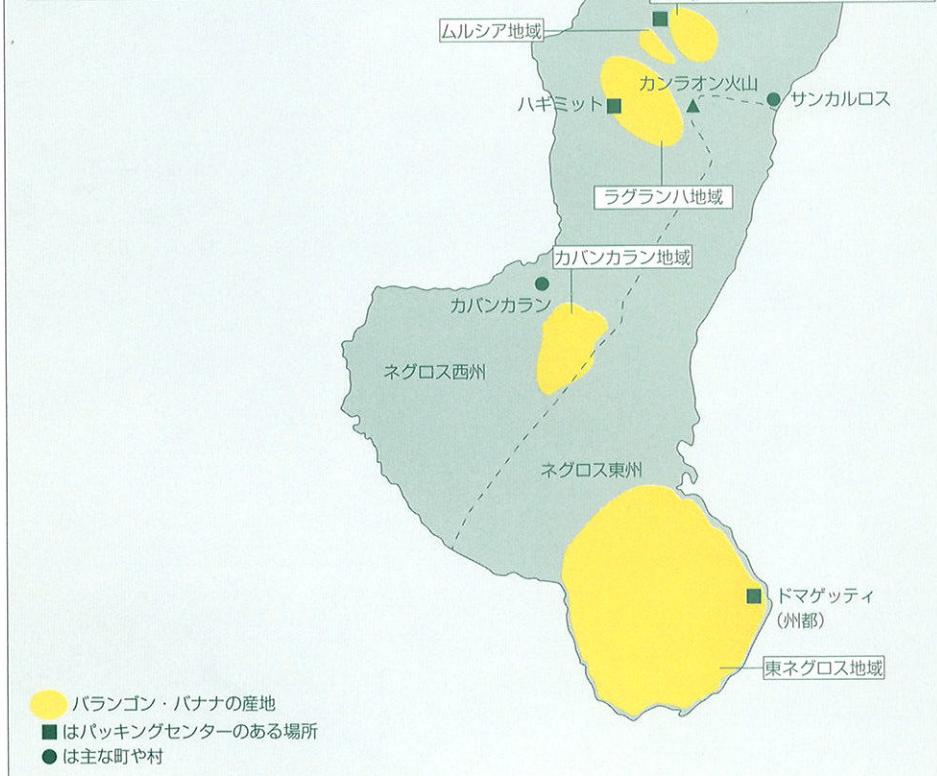
★ お子さまやお年寄りにも安心して食べていただけるバランゴン・バナナを、これからも可愛がってくださいますよう、お願いいたします。

バランゴン・リニューアル計画が進められています。



実験農場カネシゲファーム(上)と、新しくバナナ栽培を始めたナギスロッド地域の農民たち(下)

●私たちのバランゴン・バナナ生産地



納得価格のいつもおいしいバナナへ

新しいバナナ栽培にむけて

バランゴン・バナナは、それまで農薬を使ったバナナしかなかった日本の市場において、安全でおいしいバナナとして歓迎されときました。その特徴は、

- ①世界初の地場バナナの輸出だったこと、
 - ②無農薬で食味がよいこと、
 - ③不グロスへの支援に対する共感があつたこと、の3点でしょう。
- しかし、自然農法ゆえの悩みもあります。台風などの自然現象で出荷が不安定しないこと、バナナの品質にバラツキがあることなどです。これらの課題をクリアしなければ、画期的な試みも発展していくことはできません。このためにスタートしたのが、バンゴン・リニューアル計画（BRP）なのです。1999年から構想され、現在さまざまなプロジェクトが動き出しています。

バランゴン・リニューアル計画は、消費者のみなさまにおいしいバナナをお届けす

ると同時に、現地の人たちの生活をより向上させ、地域を活性化させていくための活動でもあります。

産地を広げ、安定供給へ

バランゴン・バナナ栽培は、現在不グロスだけでなく、ルソン島やミンダナオ島まで広がっています。これはバナナの生産量を安定させることを目的とした試みです。ネグロス島は毎年台風の被害を受け、時には島全体が収穫不可能な状態になってしまいます。これまで大型台風のあと、バナナが出荷できないこともしばしば起きました。しかし、産地が広がれば、台風のない他の島の収穫で補い、出荷を安定させることができます。

地域を広げることにより、自然栽培に近

いバナナ生産を、計画的に生産することが可能になります。

栽培技術が変わる

バランゴン・リニューアル計画のもう一つの大きな目標は、栽培技術の改善です。栽培技術の研究は、多方面から行われていますが、一番の課題は病害対策。また、施肥・土づくり、適切な作付けの方法、正確な栽培管理の方法も研究されています。これらの技術は、実験農場での研修などで生産者たちに伝えられます。

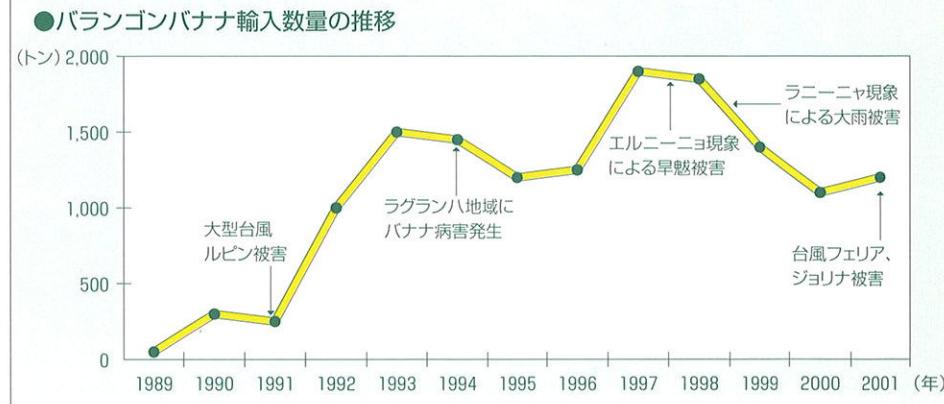
さらにバナナの運搬方法、洗浄やパッキングの方法、防カビ処理の工夫など、収穫後の取り扱いについても改良が加えられています。

生まれ変わった新しいバランゴン・バナナは、2002年の夏頃から、日本の消費者に届けられる予定です。



希望を託してバナナの苗を定植する

●バランゴンバナナ輸入数量の推移



進むバランゴンバナナの栽培技術

● 6 ●

バランゴン・リニューアル計画で、栽培技術にも、さまざまな改良・研究がなされています。その成果のいくつかをご紹介しましょう。

苗の生産供給と計画的な植付け

栽培技術のもつとも大きな課題は、病害



実験室から届いた成長点培養苗をポットに移して育苗する

対策。フィリピン全土に広がっているバンチートップ病は、束状にバナナの葉が直立してしまい、葉が十分に太陽の光を集めることができず、バナナの木全体が生育不良になってしまうという病気です。

これはウイルスによる病気で、アブラムシが媒介します。が無農薬を原則としているので、殺虫剤などを使うことはできません。このため（大学の実験室で）成長点培養した苗を実験農場の苗床で育て、各産地で定植します。

また、そうでない場合でも病気に冒されない健康な苗を、計画的に供給することも進めています。

作付け技術と他の作物との共存

かつてバランゴンバナナの出荷量が増えたとき、人々は競って山の斜面にバナナを植えつけました。熱帯の土壤はひじょうに

もろく、密植されたバナナはたちまち土壤の養分を吸いつくしてしまいました。栄養不足となつたバナナの木は、病害におかされやすくなつてしまつたのです。

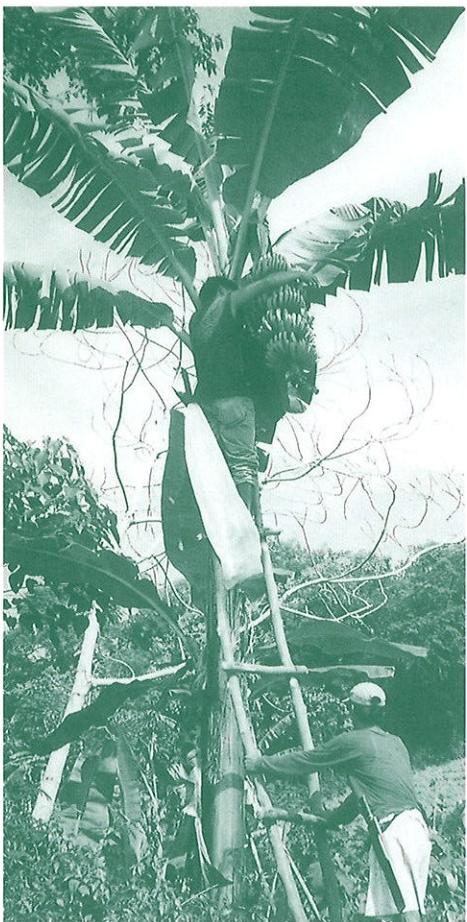
そこで密植を防ぐために、バランゴンバ

ナナの植付けの適切な間隔が研究されました。最低2・5mの間隔をあけて植付け、さらにどころどころに5mほどの間をあけて、ピーナッツなど他の作物を植えます。マメ科の植物を混作することは、土壤の窒素を固定する役割を果たすのです。

有機肥料の研究

土壤とバナナに適した有機堆肥の研究も進められています。有機堆肥をつくる工場では、砂糖キビの搾り滓に鶏糞など自然の材料を混ぜ、有機でしかも、もつとも効果の出る肥料の生産を目指しています。

また品質のよい堆肥にするために、生物



- 傷や虫害対策のための袋かけ
- ついでに施肥とマルチングをする



バナナの植付け間隔をとり、豆類などの間作で土壤栄養のバランスと収入源の複合化をはかる

活性水（バクテリア・ミネラル水）も活用しています。

熟度管理と収穫時期の確定

バナナに花が咲くと、咲いた時期を明示するマークをつけ、2週間後には摘花をして袋かけを行い、熟度管理と収穫時期の確定を徹底する方法を取り入れています。

*

こうした技術の進歩、広がりで、バナナの品質はこれまで以上にアップ、収穫量も確実に増える見込みです。

● 7 ●

人々の生活の改善へ 地域総合開発の推進

● 8 ●



バナナだけなくいろいろな作物を栽培する

を開きました。

しかし、まだまだ収入は安定せず、大地主や多国籍企業の進出という事態も起きています。ともすれば、もとの生活に戻ってしまう危険をはらんでいるのです。

ミンダナオでも、多国籍企業のプランテーションで働く人々は低賃金で働かされ、殺虫剤や殺菌剤などの農薬の被害を受けながら暮らしています。

バランゴン・リニューアル計画の目的は、バナナの品質を向上させるだけではあります。栽培・販売技術を研究し、整備していく中で、現地の人々がよりよい生活を営めるようにしていくのも、目的なのです。

ネグロスでは、バナナの栽培が人々に生産者としての意識を芽生えさせ、自立の道

こうした人々が自分たちの力で、人間らしく生きていくために、バランゴンバナナ栽培とともに、他の多様な作物の生産が必要です。目指すのは従属したモノカルチャ（单一作物栽培）の農業から、自立した複合農業への脱皮です。それは、単に増産や収入増を目的とするものではありません。地域全体が地主や企業に依存せずに暮らせる社会の創造なのです。

バランゴン・リニューアル計画は、こう



袋かけの実地研修



バナナの手入れ法や有機農法の研修を受ける農民たち

した視点にたって、農業・販売の技術や知識・価値観の教育といった人材育成と、自立できるシステムの構築を盛り込んだ地域総合開発の中軸になるのです。

バランゴン・バナナの価格には、かつて「自立基金」が加算され、バナナを輸出するために必要なトラックの購入や、パッキングセンター設備の改善、そして台風災害からの復興プロジェクトなどに利用されました。

今後は、バランゴン・リニューアル計画を中心とした地域総合開発のための財源に、バナナ代金の一部が当てられます。



自分たちの生産物を直接市場に持ち込んで販売

● 9 ●

バランゴンバナナを支える組織



バナナ产地を訪問した日本の高校生たち

これらの組織は、互いに連携しながら、活動しています。その組織には次のようなものがあります。

★日本ネグロス・キャンペーン委員会 (JCNC)

フィリピン・ネグロス島の農園労働者の緊急救援組織として、86年2月に発足したNGO活動団体です。

現在では、ネグロス島の農村開発支援とともにアジアの女性農民のネットワーク活動なども進めています。

★オルター・トレード・ジャパン社 (ATJ)

バランゴンバナナの民衆交易は、多くの人々に支えられて始められ、ルソン、ミンダナオと拡大するにつれ、さらに多くの人々の協力が広がっています。各地に、バランゴン事業と生産者の暮らしに密着して活動する社会開発NGOが生まれました。こ

日本でも生協の参加を得て、マスコバド糖、バランゴンバナナの試験輸入の後、89年に日本側の交易会社オルター・トレード・ジャパン社が設立されました。

ATJのフィリピンにおけるパートナー。当初は小さな会社として出発しましたが事業・活動基盤を国内のほかの地域に拡大しました。ヨーロッパにも市場を持つ会社に成長しました。

★オルター・トレード財團 (ATF)

社会活動を行なう組織として、ATCとは別の組織として設立。ヨーロッパからの資金援助を受け、これまでサトウキビの有機栽培への転換などを実行してきました。

現在は、これに加え、バランゴン・リニ

今ではフィリピンだけでなく、エビやコヒーなど第3世界の小農漁民を支える交易までに発展しています。

★オルター・トレード社 (ATC)

ATCのフィリピンにおけるパートナー。当初は小さな会社として出発しましたが事業・活動基盤を国内のほかの地域に拡大しました。

ユーフィアル計画、生産者の組織化、育成、有機農業生産支援など、地域統合開発を行う組織に変わってきています。

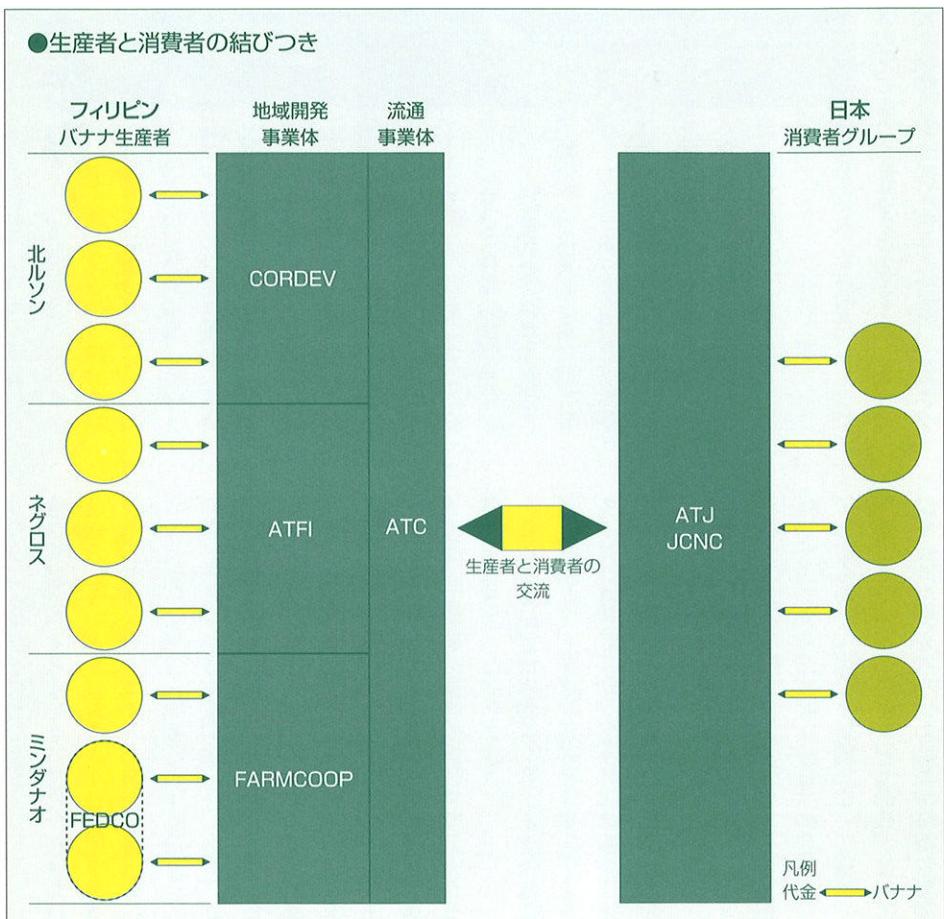
★有機農業・農村開発センター (CORDEV)

北ルソンの少数民族のための社会開発と、全面的な人間開発を目指す組織。96年にバナナの日本への輸出が始まり、99年に本格的な開発とバナナ生産指導のためにCORDEVが設立されました。

●生産者と消費者の結びつき

**★ファームコープ・フェデコ
(FARMCOOP・FEDCO)**

88年に包括的農地改革法が発効され、ミンダナオでは大企業の土地が農園労働者にも分け与えられました。その受益者に対して農業技術や調査、法的に支援するNGOとしてFARMCOOPが設立されました。土地を手にした元バナナ農園労働者たちは受益者協同組合を形成し、協力して自立を支えていくための連合体としてFEDCOを設立しました。バランゴンバナナ生産への取組みもその活動の一つとなります。



バナナ民衆交易10年の歩み

● 12 ●

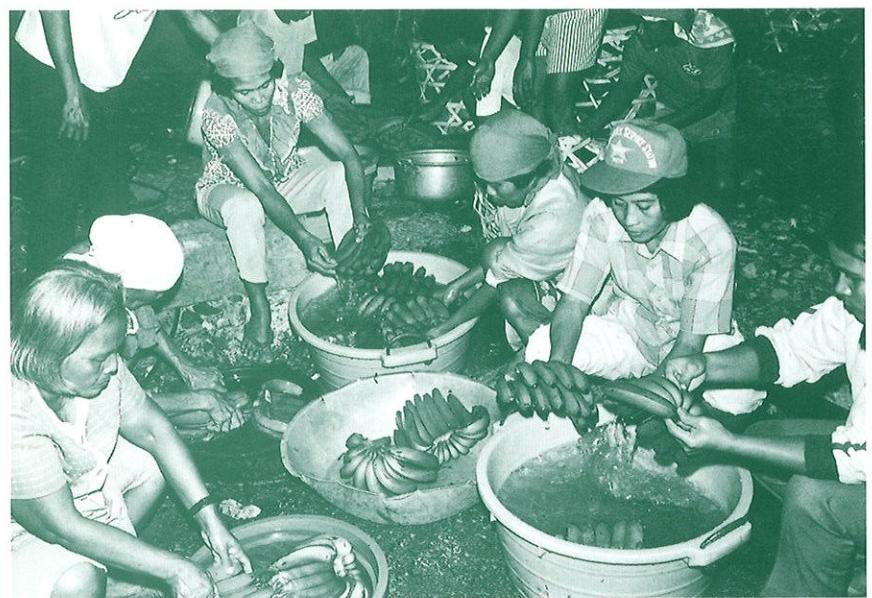
バナナ交易が始まったのは、今から約12年前の1989年のことです。ネグロスの山奥から日本まで、デリケートなバナナをポストハーベスト（薬品処理）なしで輸入しようという、かつてない試み。輸入品種として選ばれたのは、バランゴンバナナでした。

バランゴンはそれまで馴染んできたバナナに比べると、色も形もけっしてきれいではありません。でも、甘い自然な香りと酸味のあるさわやかな味、そして何よりも「安全なこと」が消費者の間で評判になつたのです。

● ネグロス島支援のために発足

この交易が始まった背景には、ネグロス島の人々の自立に向けた闘いがあります。バナナ交易はネグロスの人々を支援するためになりました。

「生産者の自立を支援するしくみができる」となどです。そして、「生産者に対する貢献」



お母さんたちが持ち寄った洗い桶でバランゴン出荷が始まった（1989年）

ネグロス島はフィリピンで4番目に大きい島。別名「砂糖の島」とも呼ばれ、フィリピン全体でできる砂糖の6割を生産していました。しかし、裕福な地主の農園で貧しい農業労働者が低賃金で働くという構造ができており、ネグロスの多くの人々は貧困にあえいできたのです。

1980年代になって砂糖の国際価格が暴落し、ネグロスの砂糖産業は壊滅状態になりました。地主たちは農園を捨て他の産業に転換しましたが、もつともひどい打撃を受けたのは砂糖労働者です。庄計の道を絶たれてしまつた彼らは、耕す土地もなく食料を購入することもできなくなつて、飢えて死ぬ子どもたちも出るという深刻な事態でした。

こうした情報が日本にも届き、「ネグロスの子どもたちに生きる力を！」と支援活動が開始されたのは86年のこと。日本ネグ

ロス・キャンペーン委員会（JCNCC）が設立されました。

ここから生まれたのが、「援助から連帯へ」という考え方です。ネグロスの人々に自分たちで農産物を生産する力をつけてもらい、それを公正な貿易活動で支えるオルタナティブ貿易（民衆交易）の構想が生まれたのです。

このときに自前の物流システムを作ることを目指して、ネグロスにオルター・トレード社（ATC）が、日本にはオルター・トレード・ジャパン社が設立されました。

● バナナが自立意識を自覚させた

なぜ、バナナなのでしょうか。その理由はいくつかあります。「ネグロスの自然の中にあるもので、環境を破壊しないで栽培できること」「バランゴンという品種が地元ではあまり消費されないため地域経済に影響

しができるまで、いくつもの難関を解決しなければなりませんでした。

こうした試行錯誤の末に、バランゴンバナナが定期的に日本に届けられるようになつたのは89年のことです。

● さまざまな困難に遭遇

バナナ交易によって、ネグロスの生産者たちは確実な現金収入を得られるようになります。しかし、この活動が農民たちに人間として認められたいという意識を芽生えさせることにつながつたのです。

バナナの刈り取り、運搬、箱詰めなど、みんなが真剣に考え、話し合いがなされました。バナナは刈り取って36時間以内に冷蔵保存しないと追熟し始めてしまいます。日本では柔らかく熟したバナナの入港は認められません。日本にバナナを届ける

善していくました。

その後、何度も困難が村を襲いました。しかしバランゴンバナナの交易があつたからこそ、ネグロスの人々は貧困や幾度もの災害から立ち上がり、自立の道を進めていくことができたといえます。

产地から消費者まで

バランゴンバナはプランテーションではなく、小農民たちの手で生産されています。ほとんどの作業は機械化されておらず、人の力が中心です。バナナの実を刈り取るのも、カゴに入れ急な山道を運ぶのも、フィリピンの農民たち。



山刀（ボロ）でバナナの実を刈り取る

生産者によって運ばれてきたバナナはオルター・トレード社の品質管理担当者の手でチェックされ、合格したものがパッキンセンターに運ばれて、箱詰めされます。薬品処理はいっさいされず、バナナはきれいな水で洗浄されるだけ。

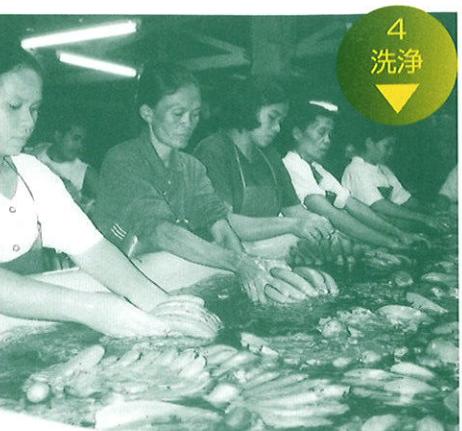


箱詰めされたバランゴンは各産地からマ

ニラに運ばれ、コンテナ詰めのあと船で日本へ4～5日かけて運ばれます。通関手続きを経て追熟加工（外気温によって3～5日程度）が行われ、選別・包装されて、消費者の皆さんに届けられます。



バナナを品質管理担当者がチェックして受け取る



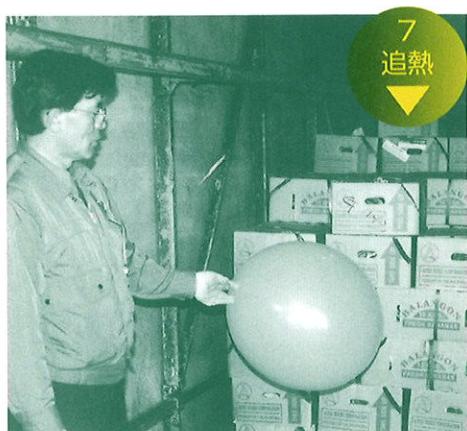
水洗いでホコリや樹液を落とす



乾燥した後に箱詰めにする



コンテナ船でマニラ港から日本まで運ばれる



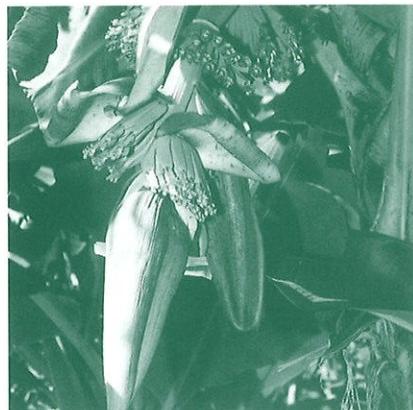
エチレンガス投入と加温により追熟を行う



消費者のみなさまに手渡しされる



おいしい！いただきます



バナナの花



オルター・トレード・ジャパン

東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
TEL 03 (5273) 8163
FAX 03 (5273) 8162
<http://www.altertrade.co.jp>



日本ネグロス・キャンペーン委員会

東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
TEL 03 (5273) 8160
FAX 03 (5273) 8667
<http://www.jca.apc.org/jcnc>